平成２５年白老町議会建設厚生常任委員会会議録

平成２５年　１月３０日（水曜日）

開　　会　　午前１０時００分

閉　　会　　午前１１時１４分

○会議に付した事件

所管事務調査

１．白老港の現状と今後の整備について

○出席委員（６名）

委員長　西田　祐子　君　　副委員長　広地　紀彰　君

委　員　氏家　裕治　君　　委　員　大渕　紀夫　君

委　員　吉谷　一孝　君　　委　員　及川　　保　君

議　長　山本　浩平　君

○欠席委員（１名）

委　員　松田　謙吾　君

○説明のため出席した者の職氏名

都市整備部長　　高畠　　章　君

港湾室長　　赤城　雅也　君

港湾室参事　　飯田　　誠　君

○職務のため出席した事務局職員

参　　事　　熊倉　博幸　君

書　　記　　小山内　　恵　君

◎開会の宣告

○委員長（西田祐子君）　ただいまより建設厚生常任委員会を開会いたします。

（午前１０時００分）

○委員長（西田祐子君）　本日の所管事務調査は白老港の現状と今後の整備についてでございます。最初に担当課のほうからご説明いただきたいと思います。

高畠都市整備部長。

○都市整備部長（高畠　章君）　初めに、本案件に対しますご説明の場、このような場を設けていただきましたこと委員長並びに委員の皆様方に厚くお礼申し上げます。本来ならば町側が能動的に積極的に説明しなければならない案件でございましたけれども、港の整備に当たりましては予算の獲得、この見通しの不透明さ、あるいは荷役設備の整備におきましては利用する企業との協議進展のタイミング等に鑑みまして、なかなかご説明する好機が得られず今日に至りましたこと深くお詫び申し上げます。

本日はそのような反省を踏まえまして、今日置かれている港湾の概況、それと整備状況並びに荷役設備の基本的な考え方について、可能な限り詳細にわたり説明させていただきたいと思います。赤城港湾室長のほうから説明させていただきますので、よろしくお願いいたします。

○委員長（西田祐子君）　赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君）　まず、資料ですが、地方港湾白老港の概況という資料がございます。あとパンフレットがありまして、その中を開きますと、３ページのこれが第３商港区で今建設中の図面です。こちらにありますのが、白老港の構想図でございます。最終的にはこういう形にしたいという構想をもっております。それと、これがチップヤード基本設計概要図ということで、去年補正をいただきまして基本設計をしまして、これに基づいて企業と協議を進めております。あくまで場所も確定ではありませんし内容についても確定ではありません。あくまで町と企業のほうで詰めていくたたき台であります。基本設計であります。

これからご説明したいと思いますが、この図面の中で第３商港区のほうにチップ船と書いてありますが、ここにチップ船が着くとなれば、ベルトコンベヤーをもっていくと。ベルトコンベヤーの長さが 1,400 メートルあります。チップヤードとここを考えたのが、面積的にここが５万 8,000 平米ということで適しているということで第２商港区の上屋の裏、この端。これが港湾事務所です。ここを利用してはどうかと、ここでフェンスの延長が 1,222 メートルでフェンスの高さが 15 メートルフェンスをつけて、チップヤードとして利用できないだろうかということで協議を進めています。総事業費も 50 億円ということで、延長が長いのとフェンスの高さが 15 メートルと相当高いものですから基礎も相当深く入りまして、当初の見込みよりは若干高くなっています。これから企業ともこの金額になって経済的にどうなのか、場所はどうなのかということをより一層詰めていきたいと思っております。

イメージとしては、下の図が石狩湾新港、最も新しいチップヤードなのですが、こういうイ

メージであります。その下のチップ荷役機械をベルトコンベヤーで全て囲ってありまして、音もしませんし粉じんも出ないということになっております。一番下が防じん柵ということで、フェンスで、これも網というよりは家で使っている網戸ぐらい小さなものです。そういうものを利用したらどうだということで検討しております。

それでは、平成 24 年度版の地方港湾白老港の概況を説明させていただきます。1ページ目開いていただきますと、白老港の特徴と最近のトピックスということです。白老港の特徴といたしましては、昭和 57 年８月に新規着工した北海道で最も新しい地方港湾です。北海道には国際拠点港湾・重要港湾など 12 港、地方港湾で 23 港、合計 35 港があります。その中で１番新しい港であります。平成２年に漁港区の一部を供用開始いたしまして、漁業振興に大きく寄与しています。平成７年５月に待望の第１商港区、ここでは現在は砂を出しております。また平成 13 年４月には第２商港区と流通拠点となる中央１号上屋も供用開始し、地元企業の原材料移入や紙製品の移出入、首都圏の需要に対応した砂の移出等活発に利用しております。23 年度取扱貨物量、去年、24 年度はまだ決定しておりませんので、23 年度は過去最高の約 113 万トンということで、地元企業の砂・紙製品を関東方面へ移出し、輸移入ということで輸入もありまして、紙製品の原材料であるライムストーン、化工でん粉や生石灰、また北海道内で消費される紙製品や鉄鋼スラグが主なものとなっております。

本港は建設途上の港であることから、現有施設だけでは地元企業の物流需要に対応し切れないということで整備促進を求める声が多く寄せられ、本港を取り巻く情勢の変化に対応して内貿ユニット貨物輸送に対応した物流機能の拡充を目指して、平成 18 年度から本格的に第３商港区の整備事業が着工となりました。第３商港区はマイナス 11 メートル岸壁でありまして、早期の暫定供用開始ということで、ことしの４月には岸壁は使用することになります。町内外企業の大幅な流通コスト削減につながり、地域経済の活性化や雇用の拡大、またその期待が大きいということであります。

最近のトピックスとしまして、先ほど申しましたが、①、平成 23 取扱貨物量、商船貨物で約 106 万トン、港全体ではもう平成 19 年から 100 万トンを超えておりまして、地方港湾 23 港中５年連続で第１位となっております。重要港湾以上を含む 35 港でも第８位の取扱貨物量で、フェリーを除くと小樽港よりも多い貨物量であります。②、臨海部に立地した食用油輸送企業、エスワイプロモーションでありますが、植物性油脂を小型タンカーで月１隻の割合で移入し、背後のタンクに貯蔵して全道各地へタンクローリー車で配送しております。これもの順調に動いております。③、町内に陸上自衛隊の弾薬支処があり、室蘭港に陸揚げした弾薬を陸送していましたが、平成 18 年度から白老港で陸揚げをしていただいております。その安全性が確保できたことから、毎年陸揚げをしております。④、ことし新規貨物として、地元企業ということでエスビーアイという会社が石山工業団地にありますが、そこで水道用仕切弁、直径が２メーター60 センチで重さ 39 トンが４基と、2,000 ミリメートル、これが６基の計 10 基を８月に東京都へ移出しました。これも定期的にまた来年度もあると聞いております。⑤、平成 18 年３月に白老港初の外国貨物船が入港して、ベトナムからの石灰石が入っております。これも順調に

推移して、去年は年７隻入っております。あくまで白老港は開港ということで、貿易港として認められていないものですから、室蘭港で１回陸揚げの手続をしまして、それから白老港に入ってきております。⑥、平成 18 年 10 月と 19 年９月に外国客船が入港しました。それぞれ 100 名が町内や登別地獄谷などの観光を実施しました。⑦、白老港朝市、夕市を開催しております。多くの町民が来場し好評であることから、今後も引き続き実施する考えでございます。

２ページに入ります。企業立地状況ということで委員さん皆さんもご存じと思いますが、白老港の背後に位置する石山工業団地では今積極的に企業誘致が進められていまして、現在 19 社の企業が進出し、うち 13 社が操業しています。そのうちの１社が先ほどのエスビーアイということでございます。白老港臨海部においては平成 20 年度から(株)エスワイプロモーションの貯蔵タンクが本格的操業を開始しまして、今後は太陽光発電、メガソーラーの建設などもありまして、発電パネルや架台などの輸送に白老港の利用を期待しております。

次に、白老港の整備状況でございます。先ほどもご説明しましたが、白老港は第１商港区のマイナス 5.5 メートル岸壁が２バース 200 メートル、第２商港区のマイナス 5.5 メートル岸壁３バースで 300 メートル、マイナス 7.5 メートル岸壁１バース 130 メートルが整備されております。平成 18 年度に 11 メートル岸壁を有する第３商港が新規採択され、平成 18 年度から本格的に着工となり、ことし３月末、４月に岸壁が完成いたします。また、国道 36 号線までの臨港道路が 25 年、来年度発注になりまして、道路を含めた暫定供用開始は 25 年の秋ごろになる見込みであります。あと静穏度、港湾静穏度向上が今後の課題となっておりまして、島防波堤及び西外防波堤の整備促進を国へ要請しております。先ほど説明いたしました第３商港区の有効利用における木材チップ荷役施設整備の基本設計を策定し、利用企業と施設規模、建設コスト、ランニングコスト、環境影響など詳細について協議検討を重ねておりますが、いまだ合意に達しておらず、今後において利用していただけるよう協議を継続しております。

３ページ白老港整備の経過、先ほど説明いたしました内容を時系列にまとめております。

４ページの港勢等ということで取扱貨物量の推移ですが、平成 23 年度が合計で 112 万 7,621 トンということになっております。

続きまして５ページ、平成 23 年の取扱貨物内容ということで、総貨物量は 112 万 8,621 トンございます。輸入としまして２万 9,451 トンのライムストーンがベトナムから入ってきております。移入では鉄鋼スラグが一番大きいです。移出としましては砂が 63 万 5,378 トン、紙製品が４万 6,240 トンということ。これが一般商船分です。そのほかに漁船だとか、消坡ブロックを臨海部でつくりまして、それを港湾区域外から出すということで、それが貨物量となります。人工リーフもやっております。

続きまして入港船舶数でございます。23 年度の総隻数が 3,132 隻となります、そのうちの商船数は 495 隻、総トン数でいいますと 52 万 2,057 トン。そのうちの商船貨物で 40 万 3,091 トンとなります。輸入貨物の詳細ですが、ライムストーンということで、これが日本製紙の紙製品の塗鋼材となります。移出は砂が約 85%、紙が６％を占めております。移入は日本製紙のライムストーンということで国内からも入ってきております。福岡の苅田港から入ってきており

ます。あと、化工でん粉、生石灰、これが日本製紙の原材料であります。また石灰石、これは生コン用の原材料であります。あと鉄鋼スラグ、これが再生資材ということで、農業関係の路盤材として利用されております。また水産品は1,993トンということで前年比1.2%の漁獲量増になっております。ちなみにことしもスケトウダラが大変よかったみたいで量はふえていると思いますが、サケが余りとれなかったと聞いております。

６ページ、白老港における漁業水揚量でございます。23年度で1,219.7トンということになっております。これは22年度に比べて相当ふえております。ちなみに平成23年度は約14億円の漁獲高があったと聞いております。前年比で8.6%の増でございます。

続きまして７ページ、漁船数の推移ですが、漁船数も年々減っておりまして平成23年度で97隻か登録しております。操業隻数ですが2,324隻が操業しております。

続きましてプレジャーボート利用状況です。このプレジャーボートは、漁組の協力を得まして斜路から上げ下げをしております。マリンクラブだけが使用できることになっておりまして、会員数が49名で所有隻数が48隻です。ただ23年の利用隻数が183隻、利用人数が550名ということで、相当減りましたが理由はちょっとわかりません。平成23年３月25日に登別港から出港したプレジャーボートが白老沖で転覆し３名が死亡する痛ましい事故が発生しまして、この辺もマリンクラブのほうには注意を促しております。

続きましてイベントとしましては、元気まちしらおい港まつりということで、22年は中止だったものですから、23年度はぐっとふえまして２万6,500人ということで大盛況にありました。

続きまして８ページ、白老港商港区利用の地元主要企業の輸送実態ということですが、１番上の(株)アサノウエダ生コンクリート、先ほど言いましたように石灰石12隻入ってきていまして、従来は室蘭港から上げておりましたが、白老港を利用していただいております。日本製紙としましてはライムストーン、これが国内で12隻、外国ベトナムからで７隻入ってきております。これももともとは室蘭港で上がっておりました。紙製品が45隻の利用で４万6,240トンであります。従来は室蘭港とか苫小牧港から出しておりまして、白老港を利用していただいておりますが、最近ちょっと白老港の利用が減ってきまして、フェリーで苫小牧から出ている量が大分多くなってきているところであります。残念ながらことしは相当減っております。

続きまして砂の移出ですが、３企業ございまして、ことし新たに１企業ふえまして４企業が砂を移出しております。23年度は246隻が利用しております。

続きまして９ページ、白老港周辺の交通アクセスということですが道道白老大滝線ということで、25年１月21日には臨港道路４号線と結ぶ国道36号にタッチするルートが開通しました。現在も利用しております。ただ、これで道道白老大滝線の冬場も全面開通となれば、後志管内の貨物も見込めるという計画ではあります。

次に10ページ、白老港海岸の概要ということで、白老港海岸は浸食が著しい海岸でして、昭和63年から平成６年にかけてほぼ毎年のように被災を受けておりました。そのような状況を抜本的に解消するため、平成２年度から海岸事業の補助採択を受けて萩野地区において消波堤の整備を進めておりました。平成７年度より離岸堤の整備を展開して平成15年度をもって全体計

画が完了しております。離岸堤を整備した以降は面的防護の効果もあり波浪減衰や堆砂が発生し、現在では海岸保全施設の被害もなく安全な海岸となっておりますが、実は第３商港区の中に入ってしまいまして現在海岸として残っているのは 100 メートルだけとなっております。

続きまして 11 ページ、白老港改修事業概要ということで事業費の概要を書いております。年度別に精査しておりまして、13 ページ、これが 23 年度までの合計であります。詳しい内容は 14 ページにありまして、23 年度末事業費としては 758 億 6,900 万円、そのうちの町負担額が 143 億 2,600 万円となります。そのうち地方債で 130 億 3,700 万円、うち一般財源が 11 億 4,200 万円となります。この中には交付税算入として年約 80%が入ってきております。また、北海道の支出もありまして、漁港区をつくったときに１億 4,400 万円の支出金がありました。

次に、資料１ということで北海道の港湾の貨物量の推移でありまして、上が重要港湾以上でございます。まん中の段が地方港湾でございまして平成 11 年度から載せておりますが、19 年度から断トツで白老港が１位となっております。

続きまして、資料の２ということで白老港建設にかかる交付税額、先ほども説明いたしましたが、平成 23 年度まで１番上ですが、57 年から 23 年度まで建設費で 758 億 7,000 万円。うち管理者負担金が 143 億 3,000 万円、うち起債が 130 億 4,000 万円。そのうち建設費単位交付税ということで 21 億 2,000 万円が入ってきております。一般財源が 11 億 4,000 万円、道費が１億 5,000 万円ということで国費が 615 億 4,000 万円入ってきております。起債償還分交付税ということで 82 億 2,000 万円。あと港湾施設の維持分交付税ということで６億 2,000 万円が入ってきていまして、交付税合計で 109 億 6,000 万円の交付税が入ってきております。今のところ第３商港区、採択されても完成が合計というところで 815 億 3,000 万円の計画で事業が進められております。そのうち管理者負担金が 152 億 7,000 万円で、一般財源が 12 億 4,000 万円の予定であります。25 年度、来年度で道路と岸壁とかできまして暫定供用いたしますが、それ以降としましては島防波堤が 110 メートル、西外防波堤が 150 メートル残っております。

次のページ、資料３ということで港湾施設使用料収入一覧表ということでございまして、平成 23 年度実績で一般会計の収入で 3,369 万 9,993 円ということになります。係留施設使用料ということで 1,100 万円。船舶給水で 122 万円。用地使用料ということで 864 万円の収入があります。下で港湾機能の整備事業ということで、上屋と用地の貸付料で 1,728 万円がございまして、港湾施設の使用料ということで、合計で 5,098 万 4,187 円の収入がございます。

資料４でございますが、これが維持管理費ということで平成 23 年度の一般会計の維持管理費が約 900 万円、港湾機能のほうの維持管理費は 164 万円で合計 1,057 万 8,699 円の維持管理費がかかっております。これは車の車検があったらふえたり、あとは除雪があればふえたりということでございます。5,000 万円の収入があって 1,000 万円支出ということになっております。

白老港港湾計画基本構想図であります。この構想図がありまして、今はこの形で採択、赤い部分が国土交通省からつくっていいですよと採択されているものです。この岸壁はほとんどできておりまして、今道路をつくっておりまして、この部分が 25 年度の道路となります。最初はこのような状況になっておりまして、これも 22 年の撮影なものですから、これは全部なってお

ります。岸壁もできております。先ほど言った西外防波堤というのはこの防波堤、これがもっとこの辺まで延びてこなければ、この中の静穏度がよくならないということで要請しています。これ全部で290メートルの予定ですが、140メートルしかできておりません。あと島防波堤ということで、この部分はまだできておりません。これができなければその中の静穏度ができないということになってございます。第３商港区がこれでございます。こういうことで整備して、この道路が来年できて供用開始になるということでございます。

○委員長（西田祐子君）　今図面で説明いただきました。皆さんからの質問をお受けしたいと思いますけれども、ございませんか。

広地副委員長。

○副委員長（広地紀彰君）　広地です。２点にかかわって端的な質問にさせていただきたいと思います。まず、チップヤードにかかわってで、今回のチップヤードの基本設計はイメージがつかめたのですけれども、総事業費として50億円を想定しているということですが、こちらのランニングコストについてはある程度シミュレーションができているのかどうか。

それと、それにかかっわって、この施設の償還の年数についてお聞きします。

○委員長（西田祐子君）　赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君）　ランニングコストにつきましては、今企業さんと協議していまして、企業さんが維持管理を行うということで協議を進めております。ただ、災害とか耐用年数が過ぎた場合にはまた白老町でその辺は整備をするということで協議を進めております。

償還年は15年と20年の起債があります。トータル的には20年の償還期間ということで今は話を進めております。

○委員長（西田祐子君）　広地副委員長。

○副委員長（広地紀彰君）　広地です。この施設自体のその償還年数とこの起債の償還とは大体同じと考えていいのでしょうか。

〔「よろしいです」と呼ぶ者あり〕

○副委員長（広地紀彰君）　わかりました。

それともう一つ、先ほどの開港ということ、外国船籍の入港にかかわっての部分でわからないことがあったので、一たん室蘭港に入るということで外国船籍の入港の重要港湾目指しているのかどうか別としても、今後の白老港の利用にとっても外国船籍の利用というのは、かなりウエートが高い部分があると思いますので、こちらで想定されている現状と課題についてもう少し詳しくお願いします。

○委員長（西田祐子君）　赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君）　実績に基づいてそこで開港できるとかということになっておりまして、実績で年間15隻以上入るのであれば出張所を設けていいという税関からのお話はいただいております。現在は年間７隻ですので、まだ実績は少ないということです。例えば、将来的にチップ船が来るのだけど開港してもらえないかというお話もしているのですが、実績がないからだめだということで、実績つき次第それは検討しますというお返事をいただいております。

○委員長（西田祐子君）　氏家委員。

○委員（氏家裕治君）　チップヤードの基本設計の部分で、中身を知っておきたいと思います。これは一応総事業費で今は50億円となっていますけれども、これ荷役機械や何かも含めた金額ですよね。荷役機械と防じん柵、ここの内容を教えていただければと思います。

○委員長（西田祐子君）　赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君）　これはあくまで基本設計で、合意に達していないお話ですので、本当のグローバルなお話なのですが、機械としましては約33億円、防じん柵で12億円、ヤード造成ということで舗装だとかにかかるお金が4億円、合計50億円ということで今は進めております。これがはやり企業としてもちょっと重荷になるということで、少しは抑えようとか、もう少しフェンスを低くしようとかなると、またどんどんお金が変わってくると思います。

○委員長（西田祐子君）　氏家委員。

○委員（氏家裕治君）　氏家です。一応この当初の計画というか企業さんとのやり取りの中で、50億円という事業費については1回町が総事業費、やるということになっていますよね。その交渉の中で荷役機械などというのは、これは本来企業さんが使うものですよね。その港の施設としてはここをチップヤードとして使ってください。防じん柵や何かの関係は町で整備しながら、取り組んでいくというやり方もあるのではないかと思うのですが、そういったところでの企業さんの考え方というのは交渉中で何か見えてくるものはあるのでしょうか。

○委員長（西田祐子君）　赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君）　現在はそこまでの交渉はしておりません。今後そのような交渉になっていくかもしれません。今一番新しいチップヤードということで石狩湾新港、先ほど説明しましたが、そこで全て公共でやっておりまして、それをもとに私たちも基本設計をしてみましたということです。

○委員長（西田祐子君）　及川委員。

○委員（及川　保君）　チップヤードの基本設計についてですけれども、来年完全に供用開始ということで計画されているのですけれども、確かに事業者の企業としての事情はわかるのです。けれども、供用開始された後にこういったことが本格的に合意に至るとか、事業者との合意がありますよね。それがどんどん先延ばしにされるようだと、これ非常にまちにとっても大きなマイナスの部分が出てくるのです。非常に経済状況今よくないこと十分わかるのですけれども、このあたりが我々非常に心配している、どうなっていくのか。港の計画そのものができ上がるのはいい、利用されない状況の中で、空白というかその部分がこれから影響してくると思うのだけれども、私はもっと真剣に企業とまちとの状況を踏まえて、行政はもう少し真剣にやってほしいと思うのです。どういう考えですか。

○委員長（西田祐子君）　高畠都市整備部長。

○都市整備部長（高畠　章君）　第3商港区に着手したのが平成18年度、そして今日まで6年ほどたってございます。その間政権の交代等がありまして、これは非常に大きな予算が必要な整備工事ございます。ですから対象とする企業との協議につきましては、港が供用開始できる

見通しを立てた中での交渉になります。ですから、これスタートをした、港の建設に着手したときには、当然地元の大きな企業が利用するという前提でつくっているわけですけれども、企業として本当に使うという社内の意思決定については、何年度くらいできるという見通しがついた時点で本格的に検討されるという状況にございます。そういった社内側の事情もくみ取った中で町側は基本設計を予算化して、そして町のたたき台を提示させていただいて交渉に入ると。こういった形で交渉に入って、町も当初は当然供用開始と同時にチップヤードもつくって利用してもらういというつもりで計画は立ててございましたけれども、そこの部分では港の進捗状況を平成 24 年度の３月 31 日、本来全て供用を開始するという前提のもとでやっていましたけれども、やはり予算的にずれて供用開始もずれ、それに合わせまして企業側のほうも検討をする時期をずらして、なおかつそのずれたのも供用開始がずれたことが原因のみならず会社を取り巻く況経済状況、紙の市況、そういったものに鑑みまして会社の中期計画、ここの部分がちょっと大型な投資をするには控えたほうがいいだろうというそのような状況が重なりまして、供用開始と同時にチップヤードができなかったと、開設することができなかったとこのような状況になっております。

それは結果論でありまして、今及川委員が懸念している部分、本当に完全に供用開始がなされた後に使われないというような状況につきましては、本当に危惧されるべき重大な事件というふうに考えておりますので、そこのところは本当に真剣に、これ口で真剣にと言うのは簡単でありますけれども、それをちゃんと行動にあらわした形で取り組んできたいというふうに考えてございます。先日、町長も就任以来、初めて日本製紙の社長に会うこともできました。そういったことで新たな交渉の糸口もつかみかけておりますので、１日も早いチップヤードの整備並びにその活用について企業との協議を強化して取り組んでいきたいと思っております。

○委員長（西田祐子君）　及川委員。

○委員（及川　保君）　これは本会議の中でも部長と議会とのやりとりをお聞きして、十分理解はしているのですが、やはり町民の皆さん心配されるところというのはそこに集中しているのです。ですから、行政側もやはりこのことはまちづくりの大きな、これから白老港、地方港湾というのは非常に大きな位置づけになってくるはずですから、なんとしても早急に、１日でも早く稼働というか本来の供用開始される状況をぜひつくり上げてほしいと思います。

○委員長（西田祐子君）　高畠都市整備部長。

○都市整備部長（高畠　章君）　まちをつくる施設には二つの役割があると思うのです。まず町民生活をしっかり底辺から支える、根底から支える施設と、もう一つは町民の生活を発展させていく、さらにいい方向に発展させていく施設と二つの施設があります。そういう意味では、この港というのは将来のまちづくりをしっかりと前向きに発展させていくための重要な施設と考えておりますので、この利活用については対象となる企業のみならず、より活発な利活用が図られるようポートセールスを強化しなければいけないと思っております。議会の皆様のいろんな情報、協力を得ながら進めていきたいと思いますので、ご理解いただきたいと思います。

○委員長（西田祐子君）　大渕委員。

○委員（大渕紀夫君）　大渕です。一つは第３商港区の形がこのようになって、これで採択したということはわかりますけど、例えば５万 8,000 平方メートル分を今の横に、もちろん何年後かわからないけど。例えばです。今の横に同じくらいの面積がとれる。裏側もう住宅地だから無理だから、横にとれるとしたら、これでベルトコンベヤー引っ張る量が少なくなりますね。私が言っているのはそこのところなのだけれども、それどれくらい少なくなるものなのか一つあるのです。我々はこちらはついこの間聞きました。ここにできると思っていたんだよ。我々は。どこかここにできるのではないかと思っていたから、そういうことでいうとこれだけの長距離のコンベアを引っ張らなくてもいいとしたら、経費が少なくなるのではないか。工事費も。それから日本製紙さんのほうもそのことによってランニングコストが減りますね。

ですから、それは責任持つ答弁でなくていいから、大体これくらいではないかというのがわかれば。やっぱり聞いたり新聞見たりしている状況によると、紙関係は業績が今余りよくないよね。特に日本製紙の場合は石巻に大量のお金がかかったということで、どれだけその資本投下ができるかというのが。単なる新聞報道ですよ、私が新聞報道の中で見ている範囲では、資本投下をするというのはかなり厳しいのではないかと思っているのです。今の課長の話では、20 年月賦だからそういうことが当たるのかどうかよくわからないけれども、しかし 20 年間という期間は今の企業にとっては短くないですよね。それだけ本当に経済状況を見渡せるか、見通せるかというのが。ユニクロなどもきょうの新聞を見れば上海で、世界で一番でかいのをつくると出ていましたけど、基本的にやっぱり海外進出が一つの、企業側はもう視野に入っているだろと。

もう一つは、今新聞見ていて思うのは、海外からパルプで入れるという、チップではなくてパルプで入れるというのが、新聞に出ている範囲で言えば若干そうなりつつあるような気がしてどうにもならないのです僕は。私紙の会社にいたものだから、なお外国からきているパルプを溶解している職場にいましたので、そのほうがコストはよくなる。運ぶ量がチップよりもパルプのほうがずっと有利ですから、はっきり言えば。海外でそれだけのものがつくれればそのほうが有利なのです。これはもうはっきりしているのです。だから、そこら辺の問題まで会社ともちろんどこまで話しているかというのがあるのだけど、そういう状況の押さえを含めて話をしていかないとだめだと思うのです。そこら辺は感触としてどのようなものでしょう。現場の私がおつき合いしているのは、下っ端の飲み友達なのだけれど、そこの話を聞いてもどうも不安があるのですけれども、率直に言って、この場で言ったほうがいいと思うから言っているのだけど、どうも不安がそこら辺であるのだけれども、この間も一杯飲んだのですが、話があまり出てきていないのです。工場の中で。それは私がつかまえている範囲なのだけど、そこら辺の感触はどんなものですか。言える範囲で結構です。

○委員長（西田祐子君）　赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君）　逆に、そういう情報をいただきたいと思っております。まだまだ私と会社と、企業さんともやっぱり、北海道工場自体としては本音ではお話をしておりますが、本社の考え方などは全然つかめていない状況ではございます。

あと、短くしたらどうなのかということ。全然何もやっていませんが、当然距離からすると相当、20億円程度落ちるのではないかというふうに思っています。それだけ何もないところにベルトコンベヤー建てるのですが、基礎打って、それも杭を打って、そしてベルトコンベヤーも１本ものですので、相当なお金がかかっています。

あと20年間の担保ということですが、起債償還が20年です。うちが返すのが20年です。例えば企業さんが10年で払うというなら10年で払っていただいて結構なのです。それをうちは持っていればいいだけの話です。それはもう交渉次第だと思っております。

○委員長（西田祐子君）　大渕委員。

○委員（大渕紀夫君）　僕が思っているのは、今会社側が結論を若干すぐに出せていないという状況ですよね。そうであれば、可能なのかどうかわかないけれども、5,800が5,000ぐらいでもいいから、この横にこちらを埋め立てやって、将来的にはここの図面になるのだから、そういう中でその土地を早くそれをやって企業の荷も軽くなる。まちの荷も軽くなるくなるわけだから、素人だからそう思うのだけれど、考えられないものなのか。例えば、20億でなくて10億でも15億でもすごい金額ですよね。やはり単純に物事を考えたときに、今なかなか上のほうと直接いかないというのであれば、そのようなことなども考えられないのかなと思うのです。だから、初めからどうしても5,800なければできないのかどうか。後でもうちょっと拡張するとかそういうことはできないものなのですか。

○委員長（西田祐子君）　赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君）　それは今後の交渉次第だと思っています。これでもしいい返事がいただけないのなら、それでは小さくしましょうと。小さくすれば安くなるとか、近くすれば安くなるとか。大渕委員が言われたとおりだと思います。それをうちのほうで２案、３案、４案ということで持っていって交渉していきたいと考えております。ただ、今の赤いところですね、そこを使うという考えなのですが、あれは国有地なのです。町で埋め立てした土地ではないのです。土砂処分場ということで国の持ち物なのです。ですから、すぐ使わせてくださいと言っても、すぐにいいよとは国が言ってくれません。実際ですと白老町が臨海部土地造成事業で行う土地だったのですが、お金がないということでそれをしませんでした。ということで、国があそこ土砂処分場で埋め立てましょうということで今の形になっています。ですから、お話ししていけばそれは使わせていただけると思うのですが、今すぐという話にはなりません。

○委員長（西田祐子君）　高畠都市整備部長。

○都市整備部長（高畠　章君）　今大渕委員からご提案という形でお話をいただきましたけれども、今まさに私たちが継続協議としている部分は、例えば室蘭でやっている場合はＸ円かかりますと、経費はこれだけ。白老港活用した場合Ｙ円かかりますと。Ｘ引くＹの差額がどれだけ大きなものになるかと。ここが輸入パルプ使ったことの一つの選択肢も含めた中で、日本製紙全体に与える収益にどれだけ貢献するか。そこのところだと思うのです。そこを今大渕委員がおっしゃったような案も含めた中で、どれだけコストを削減していけるかと。この基本計画をたたき台にして、例えばチップヤードのフェンスの高さだとか、あるいは支柱の太さだとか、

このようなものすべて、小さなところまで含めた中でコストをいかに削減するか。この 50 億円と最初に出したコストをいかに削減して、Ｘ引くＹこれをより大きなものできるかというところが、日本製紙の答えを出す部分、そこを促すものにつながるものですから、そこの部分で一生懸命協議しているというところでございますので、そういうような案、今大渕委員からいただいたような案、いろんな形で私たちも情報収集して案をぶつけていきたいと思います。そういう意味でご意見いただければ本当に幸いと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

○委員長（西田祐子君）　大渕委員。

○委員（大渕紀夫君）　大渕です。それはわかります。わかりますというのは、例えば、今の言ったところ、これは本当に使うということの条件が整えば国は貸してくれるでしょう。それで貸さないということはあり得ない話ですよね。あした、あさってという話ではないのだから。そうなればこのもとの図面からいえば十分ここにできる可能性はありますよね。例えば、後で広げるということが可能かどうかわからないけれども、それにしてもランニングコストでこれだけ長い分がここまでしかないということになれば、ランニングコストだけでものすごい違いだと思うのです。それから、維持管理費含めてベルトコンベヤーというのはすごい動力がかかりますから、長ければ長いほど。逆に言えば、スリラーで水で運んだほうが安いかもしれないし、ただ工場に直接入るのだったら水で運んだほうが安いかもしれないけれども、ここからもう１回運ばなければならないから、水分含んでしまうから重くなるから、それがまた面倒だと思うのだけど、やっぱりそういうことで言えば、ここにどういうふうにベルトコンベヤー走らせるのかわからないけれども、具体的な話になれば、上を通すのか下を通すのかという話になるでしょう。それだけでもコストものすごく違うと思うのです。例えば、上を通しても支柱の長さ違う。下をトラックが通れなければだめでしょう、ここに道路あるわけだから。そういうことを考えたら、やはり本当に白老の将来考えたって、こちらにつくるべきだというのは非常に強く思うのです。ただ、相手に対してはすぐやるという意思表示が必要であればこうなるけれども、私はやはりそういうことを本気になって相手とも少しずつ話したほうがいいのではないかと思うのです。というのが私の意見です。

○委員長（西田祐子君）　赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君）　そのとおりだと思います。そうしてこれから協議進めていきたいと思っております。

○委員長（西田祐子君）　氏家委員。

○委員（氏家裕治君）　氏家です。第３商港区から１回目を外して、白老港の整備がある程度完成に近づいてくるといった中で白老大滝線もこの間開通しました。あれが開通することによって、例えば白老港全体の当初の貨物の取扱量、これは 400 万トンだとか、300 万トンだとかという計画の中で進んできました。それは、白老大滝線の通年開通も含めて後志管内の農産物の物流だとかも考えながらこの白老港生かしていくのだよと。決して日本製紙さんだけでのものではなく、白老港全体として考えれば、そういった部分ももう既に手をつけていかなければいけない大きな問題だと思うのですが、通年開通に向けての北海道との交渉、計画どおりでい

けば白老港完成するわけですから、そういった白老大滝線が通年開通できないのであれば後志管内の物流をどうこうしようといっても、当初の計画から物流が見えてこないです。そこを道とのやりとりだとか今後の進め方だとか後志管内へのポートセールス、こういった白老港の開港に向けて整備が整いますと。どうでしょうかといったポートセールスについては、どういったような進め方をしようとしているのか。

○委員長（西田祐子君）　赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君）　除雪の通年通行については毎年要望しています。うちではないですが、企画のほうから要望していると思います。

あと農産物ですが、基本構想つくったときにも全てヒアリングしまして、可能性があるということで貨物類見込んでおります。白老大滝線のオーバーも視野に入れて計画を見込んでおります。現在ちょっと言えませんが、ある程度後志のほうの農産物もこっちのほうで動かしたいということでは、ポートセールスはしております。

○委員長（西田祐子君）　高畠都市整備部長。

○都市整備部長（高畠　章君）　補足説明させていただきますけれども、除雪の件につきまして、これはもう本当に石山西通が開通したこと、これにあわせまして通年交通ができるように道のほうも本格的に検討しております。今ある期間とめてしまって、そして除雪する経費とそれからずっと通年で除雪したほうが安くつくのではないかというのは検討しております。恐らく森野程度だったら、通年ずっと除雪したほうが安くつくのでないかというような方向で今検討されているように聞いております。

それと、後志地方との流通の部分につきましては、ある企業が一昨年大きな倉庫、芋を調達するために真狩村に大きな倉庫をつくったのです。そことうちが関係ありまして、そこで貯蔵していた芋を白老港から出すというような方向で、実はその冷蔵庫を白老町に誘致するという方向で進んでいたのですが、より産地に近いほうがいいということで向こうに取られた経緯がございます。今そこと白老港を使うという方向で交渉は進んでございますので、その実現に向けて企業誘致と連携しながらやっていきたいというような一つの事案もございます。

○委員長（西田祐子君）　氏家委員。

○委員（氏家裕治君）　氏家です。企画が道と交渉をしていますだとかではなくて、やっぱり一緒になって、北海道のほうにしても、後志からのこういった物流があると、これだけの交通量がふえると予想されますと。想定されることもちゃんと情報提供しながらやっていかないと。除雪経費のことだけ考えてああです、こうですではなくて、これからの物流のことを考えて一緒にそういった考え方を北海道に示していかないと、道だってなかなか、そうだねという感覚ではないでしょう。これだけ経済状況厳しくて、北海道だって予算にこれだけ苦渋している中で、なぜそこに本当に開通する意味があるのかとか、そこをしっかり訴えていかなければならない問題だと思います。だから、それは企画がやっているからだとかではなくて、やっぱり一緒になってポートセールスも含めて、これだけの流通量がふえるという想定というか、そのような話をしながら進めていかなければ、10年かけてやればいいなんてものではないでしょうか

ら、早期に本当に開通してもらう。そういった働きかけというのは絶対に必要だと思うのです。

ですから、今まではずっと第３商港区の供用開始が目前に迫ってきた中で日本製紙にどうしても目はいくのだけれども、そうではなくて、第３商港区の供用開始が始まるということは、白老港全体の施設整備が整ってきたということを全道、全国に示す大きなときだと思うのです。時間をかけてはいけない。本当にスピード感を持って白老港のポートセールスにあたってもらいたいと思うのですけれども、その辺もう１点だけ。

○委員長（西田祐子君）　高畠都市整備部長。

○都市整備部長（高畠　章君）　ポートセールスの実際的な動きというのは、企画の企業誘致が工業団地の誘致とともに一緒にやっているのが実態なのです。そういう意味では一体的にやっているのです。そんな中で、企業というのは、マイナス 11 メートル岸壁の第３商港区ができますから来てくださいとセールスに行きますと、できてからにしてくださいと、できるかできないかわからないのに、まだ会社として検討はできないですと。できてからにしてくださいというのがほとんどです。ですから、そういう意味ではこれから本当に、ことし 25 年度にはできますから、企画とそれから港湾と一体となってポートセールスに入ると。やっぱり港湾の技術的な部分も使ってもらうためのセールスに必要なのです。それはより一層企画とそれから港湾と一体となって企業誘致活動をしなくてはだめだと思いますので、それは氏家委員がおっしゃるとおり組織のあり方も含めた中でそういう形でやっていきたいと思っています。

○委員長（西田祐子君）　吉谷委員。

○委員（吉谷一孝君）　吉谷です。前回の説明のときに聞いたのですが、確認のために聞かせていただきたいのですけれども、この整備にかかるお金というと、この間 50 億円という話でありましたが、これは使用料から 20 年の償還の中で戻していくという考えで間違いなかったかということと、それはあくまでもこのかかった分をすべてその 20 年間で払うというだけのことなのか。それとも 20 年後にまた町で整備しなければならない部分のお金を少しは見込んで計算しているのかどうなのかということと、全くの持ち出しというか、またゼロから、今回整備するのはゼロからですね、そこから 20 年で償還して、また次の 20 年で仮に整備するとなったらまた行政側がゼロから新たにお金をつくってやるという考え方なのか。その２点お伺いします。

○委員長（西田祐子君）　赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君）　20 年で償還というのは、元金と利子も含めてそれを 20 年で割って使用料としていただくという考えであります。ですので、まず 20 年使い終わってその後どうなるかということであれば、その分のお金は見込んでおりません。ただ、耐用年数がどこまであるかは、まだまだもつと思いますけれども、そういうことでございます。

○委員長（西田祐子君）　山本議長。

○議長（山本浩平君）　１点質問させていただきたいと思います。先ほど氏家委員がおっしゃったことは当然のことでありまして、日本製紙以外の利用も当然促進をしていかなければならない。これも当たり前のことだと思うのですけれども、今までの歩んできた歴史を考えますと、過去には議会のほうも整備促進特別委員会というのもございましたし、外のほうには港湾振興

会、あるいは利用促進協議会というのもございます。そういう利用促進協議会等々と一緒に日本製紙さんあるいは旧大昭和製紙さん、一緒に国に要望活動もやっている経緯もあると思っております。そういうことから考えると、やはり何としてもこの第３商港区は日本製紙さんに利用していただかなければならないものだというふうに思います。そういった中で、本当に今製紙業界が非常に、日本製紙さんばかりではなくて、大変厳しい状況であるというのは存じ上げておりますけれども、企業というのは人が変わったら、あるいは上層部の人が変わったらガラッと考え方が変わるおそれがあります。しかしながら今までの歴史を考えるとそれでは済まされないと思うのです。ですから、本当にこれプロジェクトチームを組むなり、もう１回議会も含めて陳情するなり、何としても日本製紙さんに使っていただく確約を取るくらいのことも必要ではないのかなというふうに思っているのですけれども、この点いかがなものなのかなと。どのように考えたらいいかということをまず１点。

もう１点なのですけれども、先ほど氏家委員の質問とちょっと似ていますけれども、他の港湾都市としての連携をいろいろ模索していますよね。その進み具合、例えば苫小牧の沖待ちの船をこちらに使ってもらおうとか、そういったことも含めて、その他の港湾都市との連携、何か協議会みたいなものがあると思うのですけれども、それはどの程度進みそうなのか、そのことも含めて２点質問したいと思います。

○委員長（西田祐子君）　赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君）　第１点は、やはり白老町として議会も含めて陳情する、その点だと思います。そのように進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

あと港湾連携なのですが、まだ具体的な話は進んでおりませんが、一つ具体的と言えば防災訓練ということで、きょうたまたまなのですが、港湾で災害が起きたというシミュレーションのもとで午後から訓練することになっています。訓練によっていろんな体制を整えていこうということになっております。

あと沖待ちとその辺の具体的な動きはまだありません。客船なんかの呼び込みも、うち 7.5 メートルなものですから、ちょっとお話を持っていけませんが、11 メートルができますとお話に入っていけると思っております。

○委員長（西田祐子君）　高畠都市整備部長。

○都市整備部長（高畠　章君）　企業に対する陳情、要望、これは議会の皆さん、そして町内の団体等含めた中で陳情するということ、これやはり企業にとって一番インパクトのある行為だと思います。問題はタイミングだと思うのです。今は決算でことしひょっとしたら赤字にあるかもしれないというような情報も伝わっております。ですから、そういった企業の内部の情報なども含めて、そのタイミングを計った中でより有効な効果的なタイミングでそういう活動はぜひやらなくてはいけないと思っておりますので、そのときはより多くの各団体の方に参加していただいてやりたいと思います。

今、24、25、26 年までの３カ年の中期計画持ってございます。その中には用紙部門に対する投資はしませんと。新たな投資はしませんと実はそのようになっているのです。ですからその

辺も踏まえた中で、昨年つくられた計画がまだ生々しくある中でのタイミングも、まだちょっと早いだろうと。そういったことも含めてタイミングを計って効果的な活動になるようにしたいと思っております。そこの部分は理事者が先ほど申しましたように企業の社長にも先日お会いできましたので、その辺はタイミングについてはできるだけ早い時期につかみたいと思っておりますので、ご理解をいただきたいと思います。

○委員長（西田祐子君）　山本議長。

○議長（山本浩平君）　端的に伺いますけれども、使わないなんてことはないと。その時期は別にして、それはそういうふうに我々は認識してもよろしいでしょうか。

○委員長（西田祐子君）　高畠都市整備部長。

○都市整備部長（高畠　章君）　もちろんです。使わないということは全く想定してございません。先ほど申しましたようにＸ引くＹ、これをどれだけ大きくしていくかということ。ここが、企業が判断する最後のよりどころになるのではないかと思っておりますので、このヤードの整備費あるいは環境も含めた中で、そういった部分の詰めを急ぎたいと思っております。

○委員長（西田祐子君）　及川委員。

○委員（及川　保君）　ちょっと細かいことなのですが、港湾については荷役業務が、大きな港も小さな港もそうです。例えば苫小牧港であるとか、この近辺で名前を言ってしまうと栗林だとかそういった企業が張りついておりますよね。供用開始を目前に控えているわけですから、その荷役業務の動きといいますか、そういう状況は今どのようになっていますか。

○委員長（西田祐子君）　赤城港湾室長。

○港湾室長（赤城雅也君）　その辺はもう業者さんとはお話はしています。ただ、荷役が先なのか、貨物が先なのかということもございますので、その辺は、白老港は 11 メートル岸壁できますということは進めてお話をしております。

○委員長（西田祐子君）　随分意見も出ましたけれども、まだご意見、ご質問ございますか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

◎閉会の宣告

○委員長（西田祐子君）　それでは、以上で本日の建設厚生常任委員会を終了いたします。

（午前１１時１４分）